◆八木健　選　～『生きているうち今のうち』①～

昨秋、〝ほりもとちか〟さんから句集が届いた。タイトルは『生きているうち今のうち』。

俳句は一月から十二月に分類され、各月の扉には様々な写真が掲載されている。子どもや孫との家族写真の他、句友や恩師の稲畑汀子先生との記念写真もある。ちかさんは昭和十三年生まれで現在八十四歳だが、幼稚園入園時の写真や自作のブラウスを着た中学三年生のもの、バトミントンの選手として近畿地区代表となった大学生の時のユニフォーム姿もある。ユーモラスな表情の愛猫も家族としてしばしば登場し、親戚か旧友のアルバムでも見ているような懐かしい気分になる。

さて、俳句を掲載順にご紹介しよう。

仕返しの方が大きな雪つぶて

雪合戦だな。奥伊根の温泉宿の前で撮った家族写真が載っていたから、相手は多分、息子さんだろう。こちらは手加減したのだが、容赦せず剛球が返ってきた。吾子の成長を実感して嬉しさも。

待春やひとりぼつちといふ自由

ひとりぼっちは「寂しさ」の表現でもあるが、ひとりだからこその自由という「愉しさ」もあるという発見。ひとりぼっちこそ、最高の自由かもしれない。うすうす気づいていながら、これまで句には詠まれていなかったね。

寒紅や頑張るといふ言葉いや

紅つけて、きちんと化粧をして頑張る女性がこの句の中にいる。どうして自然体で生きてゆけないのか。もう少し肩の力を抜いて生きたい。しかたなく頑張って生きてきた自分を、今やっと嫌と言えたのである。

咲く色の念押して買ふ苗木市

苗札に写真でもついていればいいが、花のついていない状態で買う時は、見たい色、欲しい色の花の苗かどうか気になるものである。「咲く色を確かめて買

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

ふ」でなく、「念押して」に期待感がよく出ている。

子が父となりゆく早さ葱坊主

子の成長は、嬉しさと寂しさが同居するものであるが、この句は、頼もしく思う喜びの気持ちが伝わってくる。葱坊主の季語がぴったりだが、もし、娘の場合なら、どんな季語が合うだろうか。

食べて寝て食べて遊んで子猫かな

お前はいいなあ。食べて寝て遊ぶのが仕事だからなあ。子猫にとっては、そのどれもが一生懸命で、生きることのすべてである。

拾ひ来し子猫ひたすら人を咬む

拾ってきてやったのだから恩人を咬むのは筋違いだろうというのは子猫には通じない。咬むのは生まれつきの本能だから、動くものはすべて敵なのである。猫と人間の文化の違いが滑稽。

蛍舞ひ闇に高さの生まれけり

区切りのない闇に、蛍の飛ぶ高さで境界線ができた。「高さが生まれる」の表現が美しい。

夏帽子とても若いと言はれたる

「若いわねー」と言われて喜んだものの、夏帽子を褒められたのか、被っている作者が若いと言われたのか曖昧である。あえてはっきりさせないのがいい。

尺蠖に届かぬ空のあるばかり

尺蠖はシャクガの幼虫だから、成虫になれば舞うことができるのに、幼虫時代は前進あるのみである。枝先にたどりつくと空をまさぐるような動きをみせる。その精一杯、背伸びするような様子を写生して「届かぬ空」と詩になった。

きりのなきやうである庭草を引く

この間、引いたばかりなのに気が付くとあっという間に草が生えている。夏の草は手ごわい。取り始めは途方に暮れる気分だが、限られた庭の中のことだから、草も必ず取り終わるのである。同じく草引きの句、「草を引きつつ許す気

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

になつてきし」も面白い。腹の立つことがあり、むしゃくしゃした気分で草取りを始めたが、いつの間にか落ち着いてきた。気持ちが波立っていても、単純作業をしているうちに自然と冷静になるということはある。日々の何気ない心理だが俳句になってみると新鮮である。

まとまらぬ意見交はしてゐる暑さ

滑稽は、当事者が大真面目であればあるほど、第三者には可笑しさが増す。作者は、離れた所から侃々諤々を眺めて暑さだけを感じているのだ。

父の日の父がカレーを煮込みをり

句を読む愉しさの一つは、「謎解き」「読解」に成功することである。この句の場合、「父」とは、作者の「夫」なのか「父親」なのか。夫ならば、句の父は若く、作者の「父親」ならば高齢となり、カレーの具材や味付けも違ってくる。いずれにせよ、祝われる立場の父が家族のために得意のカレーを作っているという微笑ましい景だが、あれこれを想像させられて楽しい。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。